Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-28

演説家としての金韻梅 ： 米中で活動したニュー・ウーマン

林, 麗婷

(Citation)
海港都市研究,16:3-26

(Issue Date)
2021-03-25

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012829

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012829

KOBE UNIVERSITY

演説家としての金韻梅

―米中で活動したニュー・ウーマン―

林　麗婷

(LIN, Liting)

Ⅰ．はじめに

本稿は、清末から民国にかけて、中国・日本・アメリカで足跡を残した女性、金韻梅の社会活動に光を当てる。医療伝道者から出発した金は、アメリカで演説活動を行ううち、米中文化を相対化する視点を獲得した。彼女はキリスト教のフィルターを脱し、中国の女性と宗教、教育の問題について示唆に富む言説を発表している。金韻梅の社会活動を明らかにすることで、ある演説家の女性の生き方とアイデンティティを浮き彫りにし、中国女性史、東西文化交渉史に新たな視点を提供することを試みたい。

本論に入る前に、まず清末中国の知識人の「演説」に対する考え・実践を振り返る。福沢諭吉が英語のスピーチ（speech）を「演説」と翻訳し、明六社の同人とともに演説の練習を始めたのは明治 6 年、すなわち 1874 年頃のことだと言われている。[1]その後、日中の交流に伴い「演説」という言葉は日本のみならず中国にも紹介されるようになった。1899 年、日本に亡命中の梁啓超は犬養毅に啓発され、「文明を伝播する３つの利器」というタイトルの文章を発表し、文明を普及させるには学校と新聞、及び演説という 3 つの方法が必要不可欠だと主張し、特に演説は教育程度の低い人を啓蒙するのに好手段であると説いた。[2]以来、公共の場で演説をするという風潮が中国の知識人の間に広まった。[3]やがてその風潮には女性も加わるようになった。1901 年 3 月 24 日、帝政ロシアによる東三省の占領に抗議するために上海で愛国集会が開かれた。そこで民衆の団結と愛国心を呼びかける演説をした女学生薛錦琴は中国人女性演説者の嚆矢だと見られている。[4]

---

[1]中嶋久人「三田演説館開館の歴史的意義：公共圏発展の観点から見た」『近代日本研究』32、2016 年 2 月、5 頁。

[2]梁啓超「伝播文明三利器」『清議報』1899 年 8 月 1 日、『飲冰室合集』所収、上海中華書局、1936 年、41 頁。

[3]陳平原「有声的中国――“演説”与近現代中国文章変革」『文学評論』3、2007 年 5 月、6 頁。

[4]王曼隽、張偉『風華張園』同済大学出版社、2013 年、96 頁。

しかし意外なことに、中国人女性が行った早い時期の演説の舞台は海外、特に女子留学生を受け入れた東京であった。1903年4月、留日学生の間に「拒俄運動」が起こり、胡彬（夏）、林宗素ら女子留学生が留学生会館で演説をした。[5]なかでも、1904年に来日した秋瑾が積極的に演説活動に参加したことは知られている。演説練習会に参加したほか、雑誌『白話』の創刊号に「演説の良い処」を発表し、人を開化させるには演説は欠かせないものだと述べたうえ、演説のメリットとして、場所や時間に制限がないこと、無料で聴衆が多いこと、字がわからない婦人や子供にも通じること、コストがかからないため募金をせずに済むこと、（演説を聞いて）世の中のことがわかることを挙げた。[6]

梁啓超や秋瑾の例からわかるように、清末の知識人は民衆を啓蒙する手段として演説の機能を捉えることが多い。その際彼らが想定した主な聴衆は自国の知識程度が低い人々だったと指摘できよう。清末以降の演説の機能を政治宣伝・社会動員と、文化伝播・学術普及との2つに分けた陳平原の指摘[7]を踏まえて考えてみれば、秋瑾を代表とする初期の中国人女性の演説は前者、つまり政治宣伝や社会動員というモチベーションによるものが多かったと考えられる。

ところで、実は薛錦琴や秋瑾などより先に、彼女たちとは異なる文脈で文化伝播を中心とする演説活動を行った中国人女性がいた。本稿で扱う金韻梅という女性である。金は1896年から1905年の間にアメリカで50回以上の演説やレクチャーをして大きな話題を呼んだ。しかしながら、このことは従来あまり注目されてこなかったようだ。本稿は金韻梅の演説活動を整理した上で、政治宣伝とは異なる演説活動を、どのように理解すべきかを考察するが、まずは金韻梅の略歴を記しておく。

金韻梅（金雅妹、Yamei Kin、あるいはKing Ya-Mei, Y.May King）は1864年寧波生まれ、父は長老教会の牧師であった。2歳の頃両親がコレラで亡くなり、金は兄とともに宣教師D.B.マッカーティ（Divie Bethune McCartee）の養子になる。1872年にマッカーティは東京開成学校の教授になり、一家は日本で過ごすようになる。1877年にマッカーティは開成学校を辞任し一旦上海に戻ったが、同年に清国駐日公使館に招聘され、再び来日する。1880年、金韻梅は養父母とともにアメリカに渡り、二年後にニューヨーク婦人子ども病院付属女子医科大学（Woman’s Medical College of New York Infirmary）に入学、1885年

[5]周一川『中国人女性の日本留学史研究』国書刊行会、2000年、66頁。
[6]鑑湖女侠秋瑾「演説的好処」『白話』１、1904年9月、2-3頁。
[7]陳平原「“演説現場”的復原与闡釈――“現代学者演説現場”叢書総序」『現代中国』7、2006年6月、192頁。

に首席で卒業した。アメリカ各地の病院で働いた後、1887 年夏にアモイに赴いた。1889 年末からは神戸南メソジスト監督教会で医療伝道に従事した。

1894 年、金韻梅はポルトガル・スペイン系の男性 Hippolytus Laesola Amador Eça da Silva と結婚し、ハワイに移住した。翌年に息子のアレグザンダー（Alexander Amador Eça da Silva）が生まれた。1896 年、一家はサンフランシスコに引っ越しする。その後しばらくの間、金韻梅はアメリカ各地で演説活動を行い、アメリカ社会に中国・日本の文化を紹介するのに努めた。1905 年、金韻梅は中国に帰り、その二年後に天津に赴いて北洋女医学堂の開設に携わり、その後女医学堂の総教習に就任した。中国に帰ってからも、看護師を引率しアメリカに研修に行ったり、国際会議に出席したりした。

1917 年 5 月、息子のアレグザンダーが第一次世界大戦に出征し、翌年 9 月、終戦の直前にフランスで戦死した。養母が世を去った 1920 年の翌年、金韻梅は北京に居を定め、孤児院や燕京大学の活動を支援するなど慈善事業に携わった。1934 年、北京で肺炎のために死去。ほとんどの財産は燕京大学や天津木斎学校に寄付し、中華民国教育部から一等賞状を授与された。

次に金韻梅についての先行研究を整理する。孫石月は『中国近代女子留学史』で、金韻梅は初めて日本・アメリカに留学した女性だと指摘している。[8]しかし、資料の制限のためか、金韻梅及びマッカーティについての記述には誤りが少なくない。1998 年、成田静香が「ある中国人女性の神戸における医療伝道：金雅妹の前半生」を発表し、金韻梅の神戸での医療活動を詳らかにした。[9]金韻梅の神戸時代を知るために大変重要な研究である。

また、1999 年に中国第一歴史档案館は「清末金韻梅任教北洋女医学堂史料」を編纂・公開した。そこには、女医学堂の建設に関する資料、各種経費の申請書類、女医学堂第一期の名簿、また金韻梅が女医学堂と結んだ契約といった貴重な書類が収められており、それらは金韻梅の女医学堂との関わりを研究するには不可欠な史料である。[10]こうした史料が生かされて、中国近代の医療教育に金韻梅が果たした役割についての研究が増えていった。その代表的なものには、李雅梅ほかの「中国第一所公立護士学校開校校長――金韻梅」[11]、張静「晩清北洋女医学堂研究」[12]などが挙げられる。また、田濤はニューヨーク・タイムズ

[8]孫石月『中国近代女子留学史』中国和平出版社、1995 年、43-46 頁。
[9]成田静香「ある中国人女性の神戸における医療伝道：金雅妹の前半生」『人文論究』48（3）、1998 年 12 月、174-188 頁。
[10]中国第一歴史档案館「清末金韻梅任教北洋女医学堂史料」『歴史档案』4、1999 年 11 月、63-77 頁。
[11]李雅梅、王艷冬、簡雅娟、王金盾、劉玉強「中国第一所公立護士学校開校校長―金韻梅」『中華護理教育』7（11）、2010 年 11 月、528 頁。
[12]張静「晩清北洋女医学堂研究」『教育評論』5、2011 年 10 月、144-146 頁。

に載せられた金韻梅についての記事を整理し、金韻梅の演説活動を紹介した。[13]

アメリカでは、金韻梅は初めて大豆の製品をアメリカに紹介した女性として知られている。近年の金韻梅研究において最も重要な文献、『金韻梅伝』(William Shurtleff & Akiko Aoyagi(eds.).*Biography of Yamei Kin M.D(1864-1934) the First Chinese Woman to Take a Medical Degree in the United States*) はまさにカリフォルニアにある大豆研究センター (Soyinfo Center) によってインターネットで公開されたものである。この本は2016年までの金韻梅研究についての一次・二次資料を蒐集している。特筆すべきなのは本書の出版はマッカーティファミリーとナイトファミリーの支持を得、マッカーティ夫婦の金韻梅に言及した手紙を収録していることだ。ただし、『金韻梅伝』のサブタイトル「伝記つき書誌目録」Bio-Bibliography が示す如く、この本は厳密に言えば金韻梅の年譜と文献集といえる。

以上見てきたように、これまでの金韻梅に関する研究は主に日本で医療活動を行ったことや北洋女医学堂に勤めたことに集中している。これらの研究は医師としての金韻梅のありようを解明したものだ。また、田濤は金韻梅の演説者としての優れた一面を明らかにし、本研究はそこからヒントを得た。ただ、田は1904〜1917年におけるニューヨーク・タイムズの 10 本あまりの記事しか扱っていないが、後述するようにアメリカの新聞社は金韻梅のことを熱心に報じていて、合計で何百本以上の記事が見られる。また、田は金韻梅がアメリカに中国文化を紹介したこと、愛国者であることを評価したが、中国に帰るまでの活動と北洋女医学堂時代以降の活動を区別せず論じた結果、アメリカでの活動が金韻梅のライフスタイルにとってどのような意味があったのかが見えなくなっている嫌いがある。

金韻梅はなぜ医療活動をやめたのか。どのようなきっかけによってアメリカで演説活動を始めたのか。演説活動は彼女にとってどのような意味を持ち、彼女のナショナル・アイデンティティにどのような影響を与えたのか。本稿はこのような問題意識の下、まず金韻梅の少女時代を振り返り、医療伝道者になるまでの過程をたどる。そして、金韻梅の人生の過渡期——医療活動を中止し、中国に帰るまでの時期——に注目し、金韻梅のアメリカでの演説活動を考察する。アメリカの新聞報道を整理し、金韻梅が採った戦略や西洋社会に対する批評を検討し、演説活動の全体像を明らかにするとともに、金韻梅にとっての演説活動の意味を探る。その上で、演説のテーマの一つでもあり、金韻梅が強い関心を払っ

[13]田濤「中国第一个女留学生金雅妹——『紐約時報』有関金雅妹的報道」『徐州師範大学学報』37 (3)、2011年5月、1-5頁。

た中国の女性問題に焦点を絞り、帰国後に執筆した文章「わたしたちが自分を見るとき」（*As We See Ourselves*）を合わせて検討し、金韻梅の女性観を考察する。

Ⅱ．医療伝道者になる：金韻梅の少女時代

金韻梅の少女時代についての資料は乏しいが、彼女の友人であるアメリカ人の少女、クララ・ホイットニーが『クララの明治日記』[14]のなかで金韻梅のことを多く書き残している。本節ではその日記を援用しながら、金韻梅の少女時代の一面を解明してみる。

クララが初めて金韻梅に会ったのは1876年3月のことであったようだ。クララは11月にマッカーティ家へ遊びに行ったことを次のように日記に綴っている。

> ユウメイ（金のこと。引用者注）はとても独立心が強く、将来先生になるつもりだと言う。私はちょっとびっくりして、うっかり、「え、あなたが！」と言ってしまった。ユウメイは、「あら、どうして先生になっちゃいけないの。ほかの人だってなるでしょう」と、少し怒ったように言ったので、私ははっとして言い直しをした。ユウメイはヨーロッパに行って教育を終え、十八歳までに自立したいと言う。こういう独立心に富んだ話し方は清国の女性には全く新しいことだ。なんて面白いんだろう！本当にいろいろの人がいるものだ。[15]

引用からわかるように、クララは金韻梅の話をまじめに受け取らなかった。彼女は清国の女性と会う機会はほとんどなかったにもかかわらず、清国のものは全てが旧弊なものだと思っていたようだ。それだけに金韻梅に対して新鮮な思いを覚え、白人としての優越感が露骨に現れたのである。

クララの日記によれば、金韻梅は頻繁にアメリカ人少女の集まりに現れたようだ。一緒に遊んだり、勉強会を開いたり、作文の練習をしたりした。しかしクララの記述からは、金韻梅と彼女たちの間には隔たりがあったことが窺われる。1877年4月の日記に、クララは少女たちが金韻梅のためにお別れ会を開いたことを記録した。少女たちからの提案であ

---

[14]クララ・ホイットニー（Clara A. N. Whitney、1860〜1936）は1875年家族とともに来日し、後に勝海舟の長男、梶梅太郎と結婚した。『クララの明治日記』は1976年講談社から出版されたのち、1979年ニューヨークで英語版が発行された。さらに1996年に中央公論社より文庫版が出版された。英語版と日本語版にはそれぞれ内容の取捨選択が見られる。

[15]クララ・ホイットニー著、一又民子、岩原明子、高野フミ、小林ひろみ訳『勝海舟の嫁　クララの明治日記』上巻、中央公論社、1996年、278-279頁。英語版109.

ったが、その過程で小さなことで喧嘩したり、大声を出したりした。「ユウメイと私はつまらない時間を過ごした。彼女のお別れ会にもかかわらず」とクララは述べている。また二人が別れを告げたとき、「私は衝動に駆けられユウメイにキスをした」、「女の子たちはユウメイにキスをしたことがなかった。彼女は清国人だから。私は自分から模範を示さなくてはと思った」とクララは語っている。[16]金韻梅はマッカーティ夫妻が属するアメリカ人宣教師のサークルに身を置きながらも、いろいろなことで自分とほかの少女の差異に気づいたに違いない。

ただ、そのとき金韻梅はまだ幼かったし、自身のエスニック・アイデンティティについて自覚的だったと思えない。クララは 1879 年 5 月の日記に、マッカーティ夫妻がアメリカの「中国人排斥法」が可決されるまでに金韻梅を連れてアメリカに帰る予定であることを記している。金はクララに「清国人は安く働くからいけないので、自分は必要最小限しか働かないから心配いらないのに」と文句をいった。[17]このような言動から考えれば、彼女が自分の同胞に多大な関心を払っていたとは言い難いだろう。

子供の頃の金韻梅は教師になりたかったようだが、長じて医学の道を選んだのはマッカーティから影響を受けたためと考えられる。マッカーティは 1840 年にペンシルベニア大学を修了し、医学博士号を取得した。1844 年に長老教会の派遣で寧波に赴き、当地で病院を設立し、医療伝道活動に努めた。彼は高い医療技術を持ち、多くの患者の治療に当たった。自然科学の造詣も深く、化学や地理学、博物学、植物学など広い分野で知識を蓄え、東京開成学校では法律学と博物学を教えた。[18]金韻梅はマッカーティのそばで育ち、小さい頃から自然科学に親しみを覚え、マッカーティの植物の種の蒐集を手伝った。1905 年に発表された金韻梅に関する文章『金韻梅と中国人への使命』(*Yamei Kin and Her Mission to The Chinese People*) では、金は自分の職業について「私は意識的に職業を選んだわけではありません。すべては自然科学を勉強した結果です。養父の研究を通して、それに興味を持つようになりました」と述べている。[19]

マッカーティ夫妻は自らの人生を東アジアの伝道事業に捧げたが、金韻梅の将来につい

---

[16] Clara A.N. Whitney, *Clara's Diary*(New York:Kodansha International Ltd,1979),128.このエピソードは日本語版には見られない。

[17]クララ・ホイットニー著、一又民子、岩原明子、高野フミ、小林ひろみ訳『勝海舟の嫁　クララの明治日記』下巻、中央公論社、1996 年、164-165 頁。この一文は英語版にはない。

[18]田力『長老会伝教士麦嘉締研究』修士学位論文、浙江大学人文学院、2009 年、104 頁。

[19]James Kay Macgregor, "Yamei Kin and Her Mission to The Chinese People," Craftsman 9, no.2(1905):244.

ては本人の考えを尊重したようだ。マッカーティ夫人は1880年に、甥のランキンに宛てた手紙の中で、金韻梅が伝道事業に奉仕する考えを示したと記している。[20]しかし1884年の手紙ではマッカーティ夫人は、金が宗教事業に対していつも独自な考えを持っており、「喧嘩や戒めをするより、これらの本（ランキンが送ってきたもの。引用者注）は彼女によい影響を与えるかもしれません」と語った。[21]金韻梅の伝道事業に対する考えの揺らぎが窺えるだろう。

金韻梅に伝道事業を強制しなかったほか、マッカーティ夫婦は金韻梅があまりアメリカナイズされないよう心がけた。前記『金韻梅と中国人への使命』によれば、金はフォークやナイフのために箸をやめはしなかった。家では中国式のヘアスタイルをし、刺繍を施したズボンを着用したという。しかも英語を習うまえに正統的な中国経典(Chinese Classics)を勉強していた。[22]クララの日記にも金韻梅が友人によく中国の話をしたことが記されている。

金韻梅は 1882 年にニューヨーク婦人子ども病院付属女子医科大学に入るが、マッカーティは親族や友人に宛てた手紙でいつも養女が優秀であることをほめ、「高い水準で彼女の祖国のために名誉を勝ち取った」と述べている。[23]しかし、サイノロジスト、Jaroslav Průšek の回想録『中国――僕の姉妹』を読めば、金韻梅の留学は必ずしも順風満帆ではなかったことがわかる。金は「私の勉強の道は大変だった。お金が少なかったし、アメリカでは「黄禍」を排斥する風潮が起こった。町で労働者に罵倒され、同級生に見向きもされなかった」と回想していたという。[24]

---

[20]マッカーティ家族の手紙は“McCartee Family Papers”として、アメリカ長老教会（Presbyterian Historical Society）のPearl Digital Collections（ウェブアーカイブ）で公開されている。判読に当たっては、前掲Shurtleff ,Aoyagi,eds. *Biography of Yamei Kin M.D,*34-44を参考した。“Correspondence to Henry William Rankin from Juana Knight McCartee, 1862 to1906,” https://digital.history.pcusa.org/islandora/object/islandora:143615. (2021年1月5日閲覧)

[21]注20に同じ。

[22]注 19 に同じ。

[23]“Correspondence to Henry William Rankin from Divie Bethune McCartee, ca. 1866 to 1900,” https://digital.history.pcusa.org/islandora/object/islandora:143766. (2021 年 1 月 5 日閲覧)

[24]Jaroslav Průšek 著、叢林、陳平陵、李梅訳『中国――我的姉妹』外語教学与研究出版社、2005 年、167 頁。Průšek は 1930 年代北京に滞在したころ、金韻梅の家に住んでいたことがある。原著 *Sestra moje Čína. Družstevní práce* は 1940 年に出版されたが、筆者は未見。

医科大学を卒業したあと、金韻梅はフィラデルフィアや、ワシントン、ニューヨークの病院で働いたが、中国の女性だから給料は半分しか払わないと言われた。「私はわかった。キリスト教の愛情からしても、中国人は半人前だと」と金は皮肉に述べている。[25]1880 年代のアメリカでは、男性医師は圧倒的に権力を握っており、女性医師を排斥しようとしたという事実がある。それに加え金のエスニック・アイデンティティがさらに彼女を窮地に陥らせたのは想像に難くない。

1887 年 7 月、金韻梅はアメリカ・オランダ改革派教会の派遣の要請を受けてアモイに到着した。積極的にアモイの方言を習ったり、現地の官僚や商人に会ったりして、アモイで新天地を開こうとした。マッカーティは現地の有力者の支持を得て病院を建てられれば金韻梅はきっと才能を発揮できると信じた。[26]しかし、金韻梅はマラリアにかかり、病床に伏すことになった。より金を落胆させたのは、新しい家と病院を建てる計画が教会の責任者に強く反対されたことだ。マッカーティは手紙で、何人かの宣教師の間に強い反中感情が蔓延しており、その上、医療アドバイザーは女性医師を歓迎していないと述べた。[27]金韻梅のアモイでの活動は挫折を余儀なくなされた。

1889 年、金韻梅は日本に渡り、結婚するまで神戸南メソジスト監督教会で働いた。成田静香の研究によれば、金韻梅は施療所や事務所を開いてたくさんの患者の治療に当たったほか、産婆への教育を行い、看護婦の養成を目指した。[28]補足すれば、金韻梅が南メソジスト監督教会日本年会に提出した年度報告には、現地の人々についての仔細な観察が記され、福音が彼らに幸せを与えることを期待していたことが述べられている。[29]マッカーティは手紙で、金はクリスチャンとして着実に成長していると喜びをこめて語っている。[30]

以上、金韻梅の成長の跡をたどってみた。彼女は自分の考えを持ち、独立心に富んでいる。マッカーティの薫陶を受け、自然科学に関心を持ち学業も極めて優秀である。マッカーティ夫妻は彼女のことをとても可愛がっており、将来金が祖国に寄与できることを期待した。金韻梅は最初から伝道事業に対する確固たる信念を持っていたとはいえないが、中

[25]注 24 に同じ。
[26]注 23 に同じ。
[27]注 23 に同じ。
[28]注 9 に同じ。
[29]Kin, Y. M. “Kobe Dispensary for Women and Children,” *Minutes of the Fifth Annual Meeting of the Japan Mission of the Methodist Episcopal Church, South*(1891):46-48. この資料は筆者がまだ入手できていないため、前掲 Shurtleff , Aoyagi, eds. *Biography of Yamei Kin M.D,* 48 に収録されているものに依拠した。
[30]注 23 に同じ.

国へ帰ることを決めた。アモイで挫折を味わっても日本で医療伝道の使命を果たそうと努めた。一方、成長期や留学時、仕事の中でレイシズムに遭ったことは金韻梅が将来キリスト教文化・西洋文明と距離を置くようになる理由の一つとなったと考えられるのである。

Ⅲ．パフォーマンスとして：金韻梅の演説活動

1894 年から 1896 年の間、金韻梅は夫とともにハワイに滞在した。1896 年 5 月に一家はサンフランシスコへ移住し、1905 年中国に帰国するまでアメリカ各地で演説活動を行った。しかしながら、これについて金韻梅自身が書き残したものはない。一方、アメリカの新聞データベース(newspapers.com)で「Dr.Yamei Kin」で検索すると、762 件の記事が出てくる。[31]具体的にいえば、1896 年から 1905 年の間に金韻梅は少なくとも 53 回以上の演説やレクチャーをしていたことがわかっている。その活動は 1896 年から 1897 年の前期と、1902 年から 1905 年の後期に分けることができる。1896 年 9 月、アメリカの新聞が初めて金韻梅の演説活動を報じた。金は現地の長老教会の誘いに応じてアメリカの若者を対象に、「東洋女性の可能性」（*The Possibilities of the Oriental Women*）について話すと報道された。[32]そして新聞やマッカーティの手紙によれば、少なくとも 1898 年まで、金韻梅はカリフォルニアの教会で活動をし続けた。つまり、前期の活動は伝道活動の延長と考えてよかろう。興味深いことに、金韻梅の演説のあとに夫が余興で東洋の音楽を紹介・演奏することもあった。

後期では、金韻梅は盛んに大衆向けに演説活動を行った。婦人クラブのメンバーや一般大衆、また医療従事者や兵士、孤児院の子供などのように、聴衆は多種多様である。場所もカリフォルニア州にとどまらず、シカゴやボストン、ニューヨークなどアメリカの大都市を歴訪した。その演説のテーマも多岐にわたったが、大まかに「中国の女性」や「東洋の芸術」（主に中国と日本）、「中国の社会や文化」、「中国の哲学や宗教」に分けられる。一つ指摘しておきたいことは、新聞記事は主に金韻梅の演説者としての魅力や観客の反応を記すが、演説の内容についての記録は断片的だったことだ。そのため本節では金韻梅の演説の内容にも触れるが、主に彼女がなぜ演説活動をし続けたのか、誰の力を頼ったのか、どのような戦略を採ったのか、演説を行ううちに彼女がどのような変容を遂げたのかを中

[31]2021 年 1 月 5 日に検索した結果。初期の記事では、金韻梅の名が Dr.Kin Eca Da Silva のように夫の姓を冠しているものもいくつかある。

[32] “A Chinese Doctress. She Will Speak to-night at Calvary Church,” *San Francisco Call*, 16 Sept.1896, 7.

心に検討する。

まず、ロサンゼルス・タイムズ紙が1902年2月10日付の記事で、金韻梅は教育学会の要請下で中国芸術についての演説をする予定だと伝えた。[33]続いてロサンゼルス・ヘラルド紙が「中国人女性医師金韻梅博士が演説をする」というタイトルで、金韻梅の人となりを紹介し、彼女は「真の中国の新女性」、「我々アメリカの生活と教育の産物」だと主張し、華やかな中国服をまとう金の大きな写真を掲載した。[34]アメリカのメディアは金のことを「最も新しい新女性」と語り、サンフランシスコのクラブの女性に金韻梅ブームをひきおこし、多くの名媛が金と付き合いたがっていると報道している。[35]

1903年1月、金韻梅はEbellというロサンゼルスにある婦人団体の計らいで、東洋芸術に関する四回のコースを開講した。受講料は1ドルで、『東洋芸術をどう理解すべきか』(1月10日)、『中国語の構造、文学と歴史のスケッチ』(1月13日)、『お嬢さんと彼女の才能:茶道と華道』(1月17日)、『神道と日本精神』(1月22日)という内容だった。[36]日本に関するものが半分以上を占め、最終回ではさらに日本人による舞踊の演芸が披露された。

同年3月6日、金韻梅はロサンゼルス県医療協会で演説をした。ロサンゼルス・ディリー・タイムズは金のことを「ユーモアに富んでおり、演説の進行をうまくコントロールし、表情が豊かだった」と伝え、外見を除けば全てはアメリカ人と全く同じだと再び強調した。金韻梅は中国人医師の医療活動を紹介しながら、多くの例を挙げて中国人は活気に満ちた国民だと証明しようとした。[37]



1903年4月、金韻梅は隔週クラブ(Fortnightly Club)やほかの団体の誘いに応じてシカゴを訪ねた。シカゴ・トリビューン紙が大きな紙面で金へのインタビューを

[33] "Santa Barbara Brevities," *Los Angeles Times*, 10 Feb. 1902, 10.
[34] "Chinese Woman Physician, Dr. Yamei Kin, to Lecture," *Los Angeles Herald*. volumexxix, 23 Feb. 1902, 12.
[35] "at Home," *Los Angeles Times*, 23 Feb. 1902, 16.
[36] "Oriental Art is Her Theme: Dr. Yamei Kin Will Talk to the Ebell Club at Cumnock Hall Saturday," *Los Angeles Evening Express*, 8 June. 1903, 5.
[37] "Novelty for Medicos: Dr. Yamei Kin Addresses the Doctors and Tells Them How the Profession Does Things in China," *Los Angeles Times*, 7 May. 1903, 12.

掲載し、金の正面と背面の写真を合わせて載せた(前頁)。正面写真では伝統の漢服を着、背面写真では満州貴族の服を着ている。記事では金のことが「2 つの国家を持っている女性」と語られている。この記事によれば、金は身体の原因で医療活動をやめたのであって演説活動に従事したのは偶然のことで、最初はカリフォルニアの宣教団体を代表しレクチャーをしただけで、ある聴衆によりフォーマルな演説をしてはどうかと言われ、現在は多くのクラブや団体と関わっているということであった。[38]

宣教団体のためにレクチャーをするうちに金の演説の才能が発見されたのは事実に違いないが、彼女がなぜ演説活動をし続けたのかについては、前掲 Jaroslav Průšek の回想録は違う角度を提供してくれる。回想録では金韻梅の夫に触れ、「結婚生活は幸せではなかった。彼女は貧困に耐えたが、最終的には息子をつれて夫のもとを離れた」と語られる。さらに、Průšek は「彼女はアメリカの各都市で演説をすることで糊口した。その仕事は大変で、待遇も低かった」と金の演説活動に言及した。[39]つまり、演説活動は金韻梅が自立する手段だったと理解できよう。

金の離婚についての資料は少ないが、現地の新聞に報道されている。1904 年 4 月 16 日付のレコーダー紙にカリフォルニア州の上位裁判所による金韻梅への出頭命令書が掲載された。[40]夫が原告として裁判所に離婚を申請したのだ。そしてサンフランシスコ・コール紙の 8 月 13 日付の記事によれば、金韻梅は 1902 年に一度日本に行ったが、サンフランシスコに戻っても演説の仕事を口実に夫との同居を拒否したのである。金韻梅は夫が時代遅れであり、自分がニュー・ウーマンだと主張して家を出たのだと夫は証言した。[41]つまり、金韻梅は新女性の自覚を持ち、新しいライフスタイルとして家を出て自活の方法として演説活動を選んだのである。

金韻梅の演説活動は婦人クラブや YMCA との関わりを抜きにしては語れない。19 世紀半ば以降、アメリカの中流階級の女性の社会参与への意欲が高まり、数多くの団体が結成された。なかでも婦人クラブは、「中流階級の女性が必要と感じていた知的刺激と、夫の力で

---

[38] “First Chinese Woman with American Medical Degree,” *Chicago Tribune*,3 May.1903, 47.
[39]前掲『中国――我的姉妹』、167 頁。
[40] “Summonses: In the Superior Court of The City and County of San Francisco, State of California-Department No.5.Hippolyttus Laesola Amador Eca Da Silva, Plaintiff, v. Yamei Kin Eca Da Silva, Defendant. -No.89493,” *Recorder*,16 Apr.1904.
[41] “Cathay Meets American Law: Chinese Interpreter Obtains Divorce from the Spouse He Married in Japan,” *San Francisco Call*,13 Aug.1904, 14.

は満足させることのできない彼女たちの上昇志向を満たす場を提供した」のである。[42]金韻梅の活動はこのような社会情勢を背景に行われたのであり、アメリカの社交界に温かく迎えられた。アメリカの各都市を歴訪できたのも婦人クラブや有名な女性からの誘いによるものだ。また、上記シカゴ・トリビューン紙の金韻梅へのインタビューからは彼女の演説の戦略も窺える。例えば金はふだん洋式の服装に馴染んでいるが、聴衆は中国の民族服装に興味を持っているため、演説のときは意識的に民族服にしていたという。華やかなシルクや刺繍、アクセサリーなどが見られるのも彼女の演説の一つの魅力だっただろう。演説に使う道具を買い集めるため、金は1902年にわざわざ日本を訪れた。さらに、金韻梅は意識的に自分の成功談を誇示した。アモイで挫折したにもかかわらず、金はアモイでの医療活動は非常に成功を収めたと誇らしげに語っている。[43]

金韻梅はシカゴ社会でもてはやされ、シカゴ社会とクラブの女性を虜にしたと言われている。クラブの女性のほかに、社会の名流紳士や芸術家などとも交際した。[44]隔週クラブは臨時に金韻梅によるコースを追加することを決め、金韻梅が中国服を着用し、『中国の歴史と文学』、『民俗と中国人女性』、『仏教：古代と現代』、『内部の視線で社会生活と風俗習慣を見る』などのテーマで演説することになった。[45]着物への紹介にも力を入れ、シカゴの女性の間に着物を着て町を散策する流行を引き起こしたほどだ。[46]このように金韻梅のパフォーマンスは目覚ましいものであった。

Ⅳ. ステレオタイプに抗して：パフォーマンスを超える演説

金韻梅は中国服をまとい華やかなアクセサリーを身につけて演説に臨んではいたものの、決してアメリカ社会の好みやオリエンタリズムに迎合していたわけではない。後述するように、演説活動を行っていくにつれて、次第に彼女は西洋社会に批判の眼差しを投げかけるようになる。1903年の年末に、アメリカの著名な美術品コレクター、イザベラ・スチュアート・ガードナー（Isabella Stewart Gardner）の誘いに応じて金韻梅はボストンを訪

---

[42]Sara M. Evans, Born for Liberty: A History of Women in America (New York: Simon&Schuster.1997), 140.和訳はサラ・M. エヴァンズ著、竹俣初美、小檜山ルイ、矢口祐人訳『アメリカの女性の歴史――自由のために生まれて』(明石書店、1997年、225頁）に拠った。

[43] 注37に同じ。

[44] “Brilliant Chinese Woman: She Baffles Our Prejudices Against Her Race,” *Oklahoma State Register*, 14 May.1903, 1.

[45] “Fortnightly to Hear Lectures by Dr. Yamei Kin, *Chicago Daily Tribune*,16 May.1903, 12.

[46] “Kimono for Street Wear,” *Barre Daily Times*,4 Nov.1903, 4.

れた。1904 年 1 月 2 日、金韻梅は 20 世紀クラブ（20th Century Club）の新年イベントに参加し、中国の政治制度について演説を行った。彼女は西洋の人々は中国の政府は徹頭徹尾の独裁だと考えているが、そのようなことはなく、中国の皇帝は民心を重んじ統治を行い、儒教の規範を守らなければならないと説明した。また、金は中国では貴族は多くなく、身分制度は西洋ほど厳しくなくて主従は一緒にトランプさえすると述べた。金韻梅は西洋人の中国に対する偏見を改めようとし、西洋文明に批判を加えた。そして「あなたたちは神経過敏症（nervous irritability）を患っている。これは力ではなく、軟弱の症状だ」とまで言った。また、金韻梅は黄禍論に反駁し、長い歴史を持っている中国人は過去にそのようなことをしなかったし、未来にもそうしないと主張した。[47]

この頃から、金韻梅は中国と西洋とを相対化して語ることが増えた。初期には中国の女性が纏足を強いられたことや生まれながらの不平等の扱いなどを語ったが、1904 年以降、中国の上流階級の女性の家庭における主導的地位を強調するようになる。また、宗教問題についても鋭い発言をするようになった。伝道者として働いた経歴もあり、金韻梅は宗教のことについて詳しかった。ある演説で、300 年前から中国にはすでにカトリック信者がいたことを述べ、信仰が異なろうとも皆睦まじく暮らしてきたことを強調した。[48]1904 年 9 月 21 日の記事では、金韻梅はキリスト教の宣教師は中国で慈善活動を行い、多くの下層労働者を助けたが、中国の上層社会には浸透しなかったことを指摘した。さらに、(中国で)キリスト教は仏教に取って代わることはできないとまで断言した。この発言は怒りを買ったようで、この新聞は金のことを「チンクドクター」と呼んで差別した。[49]

1904 年 10 月 6 日、金はボストンで開かれた第一回の平和大会に出席し、演説をした。彼女は英国の中国侵略を批判した上で、中国人が平和を愛することを強調し、なぜ西洋人が「黄禍」を怖がっているのかは理解できないと述べた。[50]金韻梅が黄禍論に言及することが増えていったことから、黄禍論がアメリカでますますエスカレートしていっていたことが窺える。

さらに、1904 年の日露戦争の勃発により、金韻梅の日本に対する姿勢にも変化が認めら

---

[47] “Dr Yamei Kin Talks of Conditions in the Chinese Empire,” *Boston Globe*,3 Jan.1904, 27.

[48] “Chinese Family Catholic for Three Hundred Years,” *Santa Cruz Surf*,6 Aug.1904, 2.

[49] “Chink Doctor in the City: Yamei Kin Says Christianity Will not Supplant Buddhism. Her Son at St. John’s,” *Telegram*,21 Sept.1904, 7.

[50] “Little Oriental Lady Who Won Peace Congress: Dr. Yamei Kin Laments a Lack of Love for the Artistic Here,” *New York Times*,16 Oct.1904, 9.

れるようになる。1904 年 11 月、金韻梅はニューヨークで「東方の戦争に対する一人の中国人女性の考え」(*A Chinese Woman's View of the War in the East*) というタイトルの演説をした。日本は一見アジアを守るようにロシアと戦っているが、その裏には自国の政府と武士階級との間の矛盾を対外戦争に転嫁しようとする動機が働いていると述べ、武士階級は日本の軍国主義の高まりに責任を負うべきだと指摘した。また金韻梅は、日本は多大な犠牲を払っているが、果たして勝利の果実を手に入れられるのかという疑問を呈した。欧米諸国は日清戦争後のように干渉に入るだろうと金は予言したのである。[51]金韻梅の観点の当否はさておき、日露戦争後、日本は莫大な犠牲や膨大な戦費を支出したにもかかわらず、直接の賠償金を得られなかったという事実は、金韻梅の鋭い洞察力を証している。

金韻梅は日本の芸術や文化に愛着を持っており、アメリカ社会に積極的に日本文化の紹介もした。しかし日露戦争についての言説を見ると、金韻梅は当時中国や日本にいた知識人や留学生のように日本を讃えようとしなかったことがわかる。彼女が繰り返し日本の意図を語ったのは、日本の軍国主義に対する警戒によるものだろう。また、金韻梅は、中国は古くこそあるものの日本文化のルーツであり、依然として「アジアの中堅」であると主張した。中国はこの後、清王朝の崩壊を経て中華民国期に入ったものの、欧米列強の半植民地になり、さらに日中戦争や国共内戦など、文字通り苦難に満ちた時代を乗り越えなければならなかったが、金韻梅が中国の文明は西洋に劣らないと信じたのは、帝国主義に対する違和感の表れであるとともに、ナショナル・アイデンティティの覚醒とも捉えられよう。

1905 年夏に中国に帰るまで金韻梅は演説活動を続け、欧米社会に対する文明批評を行った。「あなた方偉大な西洋の人々よ、あなた方は何をしようとしているのですか？　あなた方が成功を収めたからといって、偉大な力で私達をあなた方の型にはめられると思っているのですか」と彼女は欧米諸国の植民地主義を批判している。また、西洋人は自分の文明は東洋より優位だと考えているが、「基準が違うからといって、私達（東洋）に基準がないといっていいのですか」[52]と問いただし、文化の多様性を尊重することを促した。

以上に見てきたように、金韻梅はアメリカで盛んに演説活動を行っていた。当時の新聞

---

[51] "China a Real Power, Dr. Kin's Prediction: Backbone of Asiatic Continent, She Says in Lecture," *New York Times,* 13 Nov. 1904, 5.

[52] "Viewed by Chinese Eyes," *Los Angeles Evening Express*, 6 May. 1905, 25. なお、金韻梅は西洋社会に対する批判的な姿勢を晩年になっても崩さなかったようだ。アメリカの女性作家 Grace Thompson は『中国の提灯』*Chinese Lanterns*(New York: Dodd, Mead and Co. 1924), 263 で、金韻梅について「金医師は外国人の有する観点やエゴイズム、傲慢さについて自分なりの認識を持っている。彼女はいつでも外国人を褒めるわけではない」と記述している。

記事によれば、金韻梅はきらめくニュー・ウーマンであり、アメリカの社交界で大いに歓迎されたのである。[53]金韻梅は帰国後もなお、アメリカの千以上の婦人クラブの 8000 人のメンバーにおける最も著名な女性の一人として新聞に挙げられた。[54]もちろん、金韻梅のアメリカでの教育歴や完璧な英語が繰り返し強調されたところから窺える、西洋文明こそが東洋の救いなのだという帝国の優越感や中国に対する差別の眼差しを見逃すわけにはいかない。しかしながら、金韻梅が成功を収めたのはやはり彼女自身の独特な魅力や優れた演説術、深い教養、物事に対する鋭い洞察力によるものに違いない。

英語を母語のように話しながらも華やかな中国服を着用する金韻梅にとっては、演説は一つのパフォーマンスであると同時に西洋の中国人に抱くステレオタイプに抵抗する方法でもある。さらに、演説活動は金がナショナル・アイデンティティに目覚めるきっかけにもなった。アメリカの上流階級と交流する機会が増えたが、それは中国が受ける差別や不当な扱いを痛感することにもなった。黄禍論がエスカレートしていくにつれ、金韻梅は西洋社会の根深い東洋へのステレオタイプや偏見を批判するようになる。米中を行き来する金韻梅は中国とアメリカの文化を比較して捉える視点を獲得しており、お互いの文化や宗教を尊重するよう呼びかけた。さらに、演説活動はもう一つの意味で金韻梅にとっては重要だった。すなわち、宗教と女性の問題を考え直す契機になったということだ。次節では、金の演説における中国人女性についての言説を分析した上で、帰国後執筆した文章を取り上げて、金の女性観を中心に考察を深めたい。

Ⅴ．女性の力を信じる：金韻梅の女性観

前述したように、金韻梅は神戸で 5 年間にもわたる医療伝道活動に従事した。その際に神戸の多くの婦人や子供の治療に当たり、ミッショナリーの立場に立って東洋の女性はキリスト教によって救いを見いだせるものだと記した。アメリカで行った前期の演説も伝道活動の延長線と言える。例えば、1897 年 7 月に金韻梅はサンフランシスコで女性伝道者のみの福音会議に出席し、「いかにすれば東洋の女性の心に届くか」(*How to Reach the Hearts*

[53]金に対して友好的でない報道がないわけではない。例えば、ニューヨーク・タイムズ 1904 年 3 月 20 日付の記事では、金韻梅の連続講座の成功によりニューヨークに中国や日本のブームを引き起こされたことを認めながらも、民族服をまとう金は同じパーティーに出席した若い日本人女性ほどには美しくないと記す。(“Society’s Open Door for the Japanese: Subjects of the Mikado Get a Warm Welcome from New York Hostesses,” *New York Times,*20 Mar.1904,24.)しかし全体的には金韻梅の講演は肯定的に捉えられたと考えられる。

[54]“Meeting of the General Federation of Women’s Clubs,” *Champaign Daily News*,29 May.1906, 9.

of Oriental Women）という演説を行った。インドの女性活動家ラマーバーイー,P.(Pandita Ramabai）の名前をあげ、東洋の女性は近づきにくいがクリスチャンになったらきっと熱心に働いてくれるだろうと述べ、中国の皇后がクリスチャンになることを想像してみればと東アジアでの伝道活動を鼓舞した。いうまでもなく、金韻梅は東洋の女性を伝道の対象として見たのである。また、金韻梅の発言からは彼女の東洋の女性に対する偏見も顕になった。東洋の女性を「堅苦しい、官能的で、好奇心が旺盛だ」とし、日本の女性を夫に全く隷属する者のように説明した金は、明らかに当時の西洋社会が東洋の女性に抱いていた偏見を共有していた。[55]

一方、伝道活動から手を引いた1902年ころから、金韻梅は中国の女性に対して関心を高めた。演説活動で中国の女性の現在と未来について何度か議論したことは前述の通りだ。また、1902年英語で短編小説『家族の栄光：ホノルルの中華街についての話』（*The Pride of His House: A Story of Honolulu's Chinatown*）を発表した。[56]これはホノルルのチャイナタウンに住んでいる華人の夫婦の話である。物質的に豊かな夫婦だったが結婚して何年も経っても子供に恵まれなかった。そのために家庭が崩壊の危機に瀕した時、妻は自ら近隣の若い娘を見つけて夫の妾にし、子供を産ませた。この小説はこのような中国の伝統的な家庭の子孫観念を読者に伝えるだけでなく、中国の女性がいかに自分にとって不利な局面に対応するかに着眼した作品である。それに加えこの小説は、妾の描写を通して自らの意志で結婚を決めることができない不幸な女性の姿も浮き彫りにした。また同じ1902年、『張寡婦』(The Widow Chang）という脚本を創作し、ロサンゼルスやボストンなどで上演した記録が残っている。[57]

1902年から1903年にかけて、金韻梅は中国人女性が強いられた纏足のことを述べたり、[58]中国人女性の生まれつきの不平等な扱いを語ったりした。[59]1903年2月、金韻梅は明代に出版された書籍のことに触れ、中国の女性は勤勉や温順などいろいろな規範を求められてきたが、19世紀以来女性の状況はだいぶ改善されたと述べた。[60]

---

[55]“Evangelistic Meeting of Women Endeavors,” *San Francisco Chronicle*,12 July.1897, 1.

[56]Dr. Yamei Kin, “The Pride of His House: A story of Honolulu's Chinatown,” *Overland Monthly,* ser.2. v.39(1902):655-659.

[57]no title, *San Francisco Call*,2 Nov.1902,24.残念ながら、どのような内容なのかについては不明。

[58]“Life of Chinese Women,” *San Francisco Chroicle*,16 Mar.1902, 21.

[59]“Officers Elected and Interesting Reports Received-Address by Chinese Woman,” *Fresno Morning Republican*,5 Feb.1903,8.この記事では、金韻梅は1468年に出版された書籍を紹介したとされたが、どの書籍であるかは特定できない。

[60]注59に同じ。

1904 年以降、金韻梅は中国人女性の能動的な一面を強調するようになった。1904 年 1 月 10 日、金韻梅はボストン・サンデー・グローブ紙のインタビューに応じ、中国とアメリカの女性の地位や教育の問題について意見を述べた。中国の女性は家庭を管理し夫にも影響力を持つためアメリカの女性と比べるとより政治的権力を有しており、ビジネスの面でも夫に助言できると金は主張した。「女性は自立より男性に影響を与えることのほうが重要なのか」という記者の意地の悪い質問に対して金韻梅は、確かに女性は自立しないといけないが中国には中国の事情があると弁解した。彼女はボストンの婦人クラブのメンバーたちが「競争は道徳か否か」のようなテーマを熱心に議論していることを不思議に思い、自分で生活を稼ぐことがない人にはこのような議論はできないと一蹴した。また、金韻梅は中国の女性はアメリカの女性のような学校教育は受けていないが、教育自体を受けていないわけではないと言い、さらに、中国は現在新女性運動を起こしており、積極的に西洋の教育を取り入れようとしているので教育を受けた欧米女性を歓迎していると述べた。[61]

金韻梅が西洋社会に伝えたかったのは、中国の女性は完全に、抑圧され一方的に支配されている存在というわけではないということだ。中国の女性を救いの対象として見る西洋人の視線に違和感を持っているのだ。また金韻梅の発言からは、当時の中国の新女性運動に大きな関心を持っていることがわかる。

帰国後、金韻梅は中国の問題を考え続けた。金は 1906 年から 1907 年にかけて、上海で刊行された雑誌『寰球中国学生報』(The World's Chinese Students' Journal) に英語で「わたしたちが自分を見るとき」(*As We See Ourselves*) という記事を三回連載し、中国の現在と未来について語った。なかでも中国人女性の教育について具体的な助言をした。以下その記事の内容について詳しく見てみよう。

金韻梅はまずシェイクスピアやミルトン、テニソンの作品における赤裸々な女性差別の表現を取り上げ、女性差別は世界中の問題であり中国だけの現象ではないと述べ、西洋女性の地位は必ずしも思ったほどには高くないと強調した。そして中国の女性が家庭の経済に一定の支配権を持っていることは、ある程度儒教の三従四徳による圧迫を償うことができるという。また、金韻梅は中国における一夫一婦多妾の問題に触れ、男が妻の怒りから逃れ妾に慰めを求めようとすることは家庭の不和を導くことにほかならないと語り、「知識人の中には、法律上の妻を一人以上持つことがなく、誰から見られても恥ずかしくないような清らかな倫理的生活を送っている例がたくさんあると言ってもいいだろう」と述べ

[61] "First Chinese Woman to Take a Medical Degree in the United States," *Boston Sunday Globe*, 10 Jan. 1904, 37.

た。[62]この文章の読者――西洋に留学経験を持つ知識人――のことを考慮に入れると、金韻梅は知識人に妾を娶らないように勧めていると考えられる。

そして金韻梅は中国人女性の纏足の問題を取り上げ、「纏足ほど有害な風俗はない」と手厳しく批判した。彼女は「中国の偉大なる学生団体」（寰球中国学生会のことと思われる。引用者注）の若者に呼びかけ、若い人たちが纏足でない女性とだけ結婚をするという旨の宣言をすれば、外国の夫人や総督の宣言よりも大きな効果があると主張した。[63]

次に、金韻梅は中国の女性は無学なのではなく家庭生活で訓練を受けていると断った上で、現代教育を受けて新しい環境に適応させる必要性を説いた。そしてその際にはアメリカの経験が参考になるといい、高度な教育を受けたアメリカの女性はキャリアなり家庭なりでより多くの選択肢を得ながらも、女性の純潔は損なわれていないと述べた。金韻梅は中国人女性の生活のモチーフは家庭への奉仕としながら、近代教育を受けるに当たっての具体的なアトバイスをする。まず女性は算数や自然科学について勉強する必要があるとする。算数を習得すれば正確に記帳ができ、家庭の支出をよりよく調整できる。自然科学の知識をもって病に対すれば理解や予防ができる。そして最も重要なのは、普遍的な自然現象が理解できれば化け物などに対する恐怖から解放され、そのような雰囲気で子供を育てることができることだという。また、裁縫や料理の勉強も必要で、たとえ自分がしなかったとしても修めていれば人を指導することができるとする。「現代の方法を取り入れれば、効率を上げて時間や精力を節約することができる」と語るのである。[64]

さらに金韻梅は、中国の女性は歴史や倫理教育を受けて過去と現在、未来の関係に対する理解を深めるべきだと述べた。加えて、古典文学を勉強する必要があるように、刺繍、音楽、絵画などを学ぶのも決して悪いことではないとする。梁啓超をはじめとする清末の知識人は「女学」を提唱した。その中では伝統的な文才（作詩の能力）を有する女性は時代遅れのものとして退けられ、西洋の知識に備えた女性こそ時代のニーズに応えられる者だとされている。[65]こうした意味では、古典の教養を大切にする金韻梅の考えは当時の潮流に逆らうものだ。もちろん金も中国の女性は外国語を学ぶべきだと考えていた。外国語の

---

[62] King Ya-mei,M.D, “As We See OurselvesⅡ,” *The World’s Chinese Students’ Journal* 1,no.4(1907):13.

[63]King Ya-mei,M.D, “As We See OurselvesⅡ,” 14.

[64]King Ya-mei,M.D, “As We See OurselvesⅡ,” 16.

[65]梁啓超の「才女批判」について胡纓は、梁啓超が中国伝統の女性の学問を否定し、中国の伝統と現在、未来とのつながりを断ち切って国民国家のための女子教育を求めたと指摘した。胡纓「歴史書写与新女性形象的初立：従梁啓超「記江西康女士」一文談起」『近代中国婦女史研究』第9期、2001年8月、1-29頁。

知識は、それによって女性が好む古いロマンティックな物語に親しめるだけではなく、「事実と空想の新たな世界を切り開くことができる」と彼女は述べた。[66]金韻梅はもとより文学に親しみを持っており、外国語の勉強を直接に現実問題を解決するための性急な手段としてではなく、西洋文学を知るチャンネルと見なしていたのである。

女性の就業については、金韻梅は政府が労働者の利益を守るべきだと主張した。女性は定期的に様々な業界の指導を受ければ賢く働くことができるとし、「中国人女性の自然の才能と実行力に任せて必要な訓練を与えれば、彼女たちはこの偉大な産業の様々なポジションを効率的に埋めることができる。一日の紡績工から、熟練したデザイナー、科学的発明家、先見の明のあるメーカーにいたるまで」[67]と語ったように、金韻梅は女性のジェンダーを超える力に期待を寄せている。

最後に、金韻梅は女性の社会進出の意味を強調した。金はアメリカの婦人クラブのような団体を称賛する。女性は家庭の外で友情の絆を築き、そのうちにより広いサークルを作り社会活動に参加することで、多くの人と出会い経済と社会のメカニズムを理解することができるとする。また、金韻梅は伝統的な陰陽思想の観点から男女のバランスの重要性を説き、男性が女性を尊重すべきだと呼びかけて、男性は挫折したときに母の慰めを求めるにもかかわらず、「女性の奉仕を軽視することは自らのインスピレーションの源を軽視すること」だと主張した。[68]

19 世紀前半のアメリカでは、産業革命や市場経済の発展に伴い男女分業が進み、男性は政治・経済という「男性の領域」、女性は家事・育児という「女性の領域」を確立するようになった。Barbara Welter の研究によれば、19 世紀なかば、「真の女性らしさ」(the cult of true womanhood) という考えがアメリカに浸透した。つまり理想の女性は「敬虔」(piety)、「純粋」(purity)、「従順」(submissiveness)、「家庭的」(domesticity) であるべきだとされたのである。[69]金韻梅の主張には女性の家庭への奉仕や母性の力の強調があり、彼女が「真の女性らしさ」から影響を受けたことは否めない。しかし、それと最も異なる点は宗教というフィルターを外したことにあるだろう。「わたしたちが自分を見るとき」は、女性が家庭を出て教育を受け、自立することに重点が置かれている。特に女性の就業や社会進出に関する細かな説明は、彼女の期待――中国人女性が自然の才能と

---

[66] 注 63 に同じ。
[67]King Ya-mei, M.D, “As We See OurselvesⅡ,” 17.
[68]King Ya-mei, M.D, “As We See OurselvesⅡ,” 18.
[69]Barbara Welter, “The Cult of True Womanhood:1820-1860”, *American Quarterly* 18, no. 2, part 1(1966):152.

実行力を発揮して自己実現を果たすこと――を如実に語っているのだ。「女性は教育を受けねばならない」と金韻梅は文章を締めくくった。[70]

梁啓超や秋瑾は、新しい中国を目指すときにたとえ戦略であったとしても中国の伝統的な女性を批判した。一方、陰陽思想の観点を援用し男女平等を説く金韻梅は、儒学や道学のような中国伝統の哲学、中国独自の論理を精神のよりどころにして女性の力を説いた。一見すれば清末中国の潮流――西洋文明や社会進化論によって国を復興させること――に逆らっていたように見えるが、最近の中国人女性研究の動向――伝統中国の女性をただ単に抑圧された被害者として想定してきたパラダイムを見直すこと[71]――にあわせて考えてみれば、金韻梅の女性の力を信じる視点は貴重に思われる。オリエンタリズムに抵抗を表す金韻梅の言説は再評価に値するだろう。

Ⅵ. 終わりに

これまでの金韻梅研究においては、主に医師としての活動が注目された。本稿は金韻梅の演説活動を考察した。まず金韻梅が医療伝道者になるまでの過程をたどり、後年キリスト教伝道事業を諦めた原因の一つとして、少女時代や就学・仕事の時にレイシズムに遭ったことがあることを指摘した。そして、アメリカの新聞報道に基づいて、金韻梅の演説活動を考察した。民族服を着用し東洋の芸術を紹介する金韻梅の演説活動は一種のパフォーマンスとして見ることができるが、ナショナル・アイデンティティの目覚めの過程でもあると指摘できよう。さらに、宗教と女性の問題にしぼり、金韻梅の言説の再評価を試みた。キリスト教伝道事業から身を引いた金韻梅は、中国伝統の哲学に依拠しながら男女平等を唱え、中国の女性は「女性の領域」にとどまらずに近代教育を受けて自己実現を目指すべきだと主張した。金韻梅の女性観はキリスト教文化を乗り越えたものとして考えられる。金韻梅はオリエンタリズムに抵抗し、中国人女性の力を信じたのである。金韻梅の例を通して、異文化を生きた女性がアイデンティティを模索した過程を浮かび上がらせたのみな

---

[70]King Ya-mei,M.D, “As We See OurselvesⅡ,” 19.

[71] たとえば、ドロシー・コウは『内室の教師：17 世紀中国の女性と文化』Dorothy Ko, *Teachers of the Inner Chambers: Women and Culture in Seventeenth-Century China*(California: Stanford University,1994),7-8 で、五四運動以降に広まった被害者としての中国女性史に異議を唱えた。コウは次のように説く。儒教の三従規範という理想化された理念と人々の生活実践とは必ずしも一致するわけではない。また、三従はたしかに女性の人格と独立した社会身分を奪うが、女性の個性をなくすわけではない。明末の女性は才能を発揮し、儒教規範を守りながらも活動空間を広げ、読書を通してネットワークを築き、高い地位を得ることもあった。すなわち、コウは中国の女性を、理想化された理念、生活実践、女性のパースペクティブという 3 つのレベルでダイナミックに考えるべきだと主張している。

らず、中国女性史、東西文化交渉史に新たな視点を提供できよう。

1908 年以降、金韻梅は天津にある北洋女医学堂の責任者になり、中国人女性看護師の育成に携わった。その間に清朝は崩壊し、中華民国が成立した。中国人女性は新しい局面を迎えた。中国で医療教育を実践するに当たって金韻梅の女性観や中国に対する考えにどのような変容が起きたのかについては、次の課題にしたい。

付記：本稿は科学研究費助成事業（番号：20F20005）の研究成果の一部である。

参考文献

英語（アルファベット順）

Evans, Sara M. *Born for Liberty: A History of Women in America*. New York: Simon&Schuster.1997.

Kin, Yamei. “The Pride of His House: A story of Honolulu’s Chinatown,” *Overland Monthly,* ser.2. v.39(1902):655-659.

Kin, Yamei. “As We See Ourselves II,” *The World’s Chinese Students’ Journal* 1,no.4(1907):12-19.

Ko, Dorothy. *Teachers of the Inner Chambers: Women and Culture in Seventeenth Century China*. California: Stanford University,1994.

Macgregor, James J. “Yamei Kin and Her Mission to The Chinese People,” *Craftsman* 9, no.2(1905):244.

Shurtleff, William and Aoyagi, Akiko (eds.). *Biography of Yamei Kin M.D(1864-1934)(Also Known As 金韻梅 Jin Yunmei),The First Chinese Woman to Take a Medical Degree in the United States(1864-2016):* Extensively Annotated Bio-Bibliography, 2nd.California: Soyinfo Center,2016.

Thompson, Grace G. *Chinese Lanterns*. New York: Dodd, Mead and Co,1924.

Welter, Barbara. “The Cult of True Womanhood:1820-1860,” *American Quarterly* 18, no.2, part 1(1966):152.

Whitney, Clara A.N. *Clara’s Diary*, New York: Kodansha International Ltd,1979.

中国語（拼音順）

陳平原「“演説現場”的復原与闡釈——“現代学者演説現場”叢書総序」『現代中国』7,

(2006):192.
陳平原「有声的中国――“演説”与近現代中国文章変革」『文学評論』3,(2007):6.
胡纓「歴史書写与新女性形象的初立:従梁啓超「記江西康女士」一文談起」『近代中国婦女史研究』9,(2001):1-29.
Jaroslav Průšek(叢林、陳平陵、李梅訳)『中国――我的姉妹』外語教学与研究出版社,2005.
鑑湖女侠秋瑾「演説的好処」『白話』1,(1904):2-3.
梁啓超『飲冰室合集』上海中華書局,1936.
李雅梅、王艶冬、簡雅娟、王金盾、劉玉強「中国第一所公立護士学校開校校長–金韻梅」『中華護理教育』7(11),(2010):528.
孫石月『中国近代女子留学史』中国和平出版社,1995.
田濤「中国第一个女留学生金雅妹――『紐約時報』有関金雅妹的報道」『徐州師範大学学報』37(3),(2011):1-5.
田力『長老会伝教士麦嘉締研究』修士学位論文、浙江大学人文学院,2009.
王曼隽、張偉『風華張園』同済大学出版社,2013.
張静「晩清北洋女医学堂研究」『教育評論』5,(2011):144-146.
中国第一歴史档案館「清末金韻梅任教北洋女医学堂史料」『歴史档案』4,(1999):63-77.

日本語(五十音順)

クララ・ホイットニー(一又民子、岩原明子、高野フミ、小林ひろみ訳)『勝海舟の嫁 クララの明治日記』上下巻、中央公論社,1996.
サラ・M. エヴァンズ(竹俣初美、小檜山ルイ、矢口祐人訳)『アメリカの女性の歴史――自由のために生まれて』明石書店,1997.
周一川『中国人女性の日本留学史研究』国書刊行会,2000.
中嶋久人「三田演説館開館の歴史的意義:公共圏発展の観点から見た」『近代日本研究』32(2016):5.
成田静香「ある中国人女性の神戸における医療伝道:金雅妹の前半生」『人文論究』48(3)(1998):74-188.

アーカイブ

“McCartee Family Papers” (2021 年 1 月 5 日閲覧)
https://digital.history.pcusa.org/islandora/object/islandora:143766

https://digital.history.pcusa.org/islandora/object/islandora:143615

新聞記事（日付順）

“A Chinese Doctress. She Will Speak to-night at Calvary Church,” *San Francisco Call*,16 Sept.1896, 7.

“Evangelistic Meeting of Women Endeavors,” *San Francisco Chronicle*,12 July.1897, 1.

“Santa Barbara Brevities,” *Los Angeles Times*,10 Feb.1902, 10.

“Chinese Woman Physician, Dr. Yamei Kin, to Lecture,” *Los Angeles Herald*. volumexxix,23 Feb. 1902, 12.

“at Home,” *Los Angeles Times*,23 Feb.1902, 16.

“Life of Chinese Women,” *San Francisco Chroicle*,16 Mar.1902, 21.

“Officers Elected and Interesting Reports Received-Address by Chinese Woman,” *Fresno Morning Republican*,5 Feb.1903, 8.

“First Chinese Woman with American Medical Degree,” *Chicago Tribune*,3 May.1903, 47.

“Novelty for Medicos: Dr. Yamei Kin Addresses the Doctors and Tells Them How the Profession Does Things in China,” *Los Angeles Times*,7 May.1903, 12.

“Brilliant Chinese Woman: She Baffles Our Prejudices Against Her Race,” *Oklahoma State Register*, 14 May.1903, 1.

“Oriental Art is Her Theme: Dr. Yamei Kin Will Talk to the Ebell Club at Cumnock Hall Saturday,” *Los Angeles Evening Express*, 8 June.1903,5.

“Kimono for Street Wear,” *Barre Daily Times*,4 Nov.1903, 4.

“Dr Yamei Kin Talks of Conditions in the Chinese Empire,” *Boston Globe*,3 Jan 1904, 27.

“First Chinese Woman to Take a Medical Degree in the United States,” *Boston Sunday Globe*,10 Jan.1904, 37.

“Society’s Open Door for the Japanese: Subjects of the Mikado Get a Warm Welcome from New York Hostesses,” *New York Times*,20 March.1904, 24.

“Summonses: In the Superior Court of The City and County of San Francisco, State of California “Department No.5.Hippolyttus Laesola Amador Eca Da Silva, Plaintiff, v. Yamei Kin Eca Da Silva, Defendant. -No.89493”. *Recorder*,16 April.1904.

“Chinese Family Catholic for Three Hundred Years,” *Santa Cruz Surf*,6 Aug 1904, 2.

“Cathay meets American Law: Chinese Interpreter Obtains Divorce from the Spouse He Married in

Japan," *San Francisco Call*,13 Aug.1904,14.

"Chink Doctor in the City: Yamei Kin Says Christianity Will not Supplant Buddhism. Her Son at St. John's," *Telegram*,21 Sept.1904,7.

"Little Oriental Lady Who Won Peace Congress: Dr. Yamei Kin Laments a Lack of Love for the Artistic Here," *New York Times*,16 Oct.1904, 9.

"China a Real Power, Dr. Kin's Prediction: Backbone of Asiatic Continent, She Says in Lecture," *New York Times*,13 Nov.1904, 5.

"Viewed by Chinese Eyes," *Los Angeles Evening Express*,6 May.1905, 25.

"Meeting of the General Federation of Women's Clubs," *Champaign Daily News*,29 May.1906, 9.

（日本学術振興会外国人特別研究員）